The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シャーウッド・アンダソンのアイロニー ： 『ワインズバーグ・オハイオ』論のために
Author(s)	森岡, 裕一
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1980, 14, p. 3-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シャーウッド・アンダソンのアイロニー

——『ワインズバーグ・オハイオ』論のために——

森　岡　裕　一

作品論に関して言えば、『ワインズバーグ・オハイオ』[1]（以下『ワインズバーグ』と略記）に一定の観点から緻密な意味づけを行なうことはむずかしい。短編の集合体がそのまま一つの長編小説を成すという構成上の特殊性や，印象主義的な描写という問題の他に、作家の言わんとすることを理解することの本質的な困難さがあるように思える。つまり、アンダソン自身の対象捕捉が多分に断片的で，小説という言葉で通常連想されるような、一貫した論理をきめ細かに表現するという姿勢がきわめて希薄なのである。そのうえ，この作家特有の不透明な表現や、しばしば見うけられる視点の混乱が、一層この小説を分かりにくいものにしている。少なくとも、作家の伝記的事実や他の作品を援用せずに、この作品をして、自らを筋道たてて語らしめる作業は、予想以上に困難である。様々な観点から小説中の意味の間隙を埋め、そこに何らかの主題を汲出そうとするこれまでの試みも、作品に即して検討する限り、いずれもが正しい面を持ちながら、同時に、いずれもが決定的とは言い難い。

とりわけ、この小説を、近代社会に生きる人間一般の孤独を描いたものと受け取る読み方や、フロイト的「性」を取り扱った小説として理解する立場は、あまりに普遍的次元でこの小説を捉えすぎてはいないかという疑問が残る。多分に自伝的要素の濃いアンダソンのような作家の作品を考える場合、時と所を超越したテーマで裁断することは、新しい見方で作品の

世界を拡大するとともに、作品の持つ土着的肌ざわりをそぎ落とすことにもなりかねない。むしろそれよりは、孤独・疎外・不安などという現代文学批評の常套句を捨てて，ノスタルジアという言葉の中に『ワインズバーグ』の今日的意義を見出そうとするフェレス教授の主張[(2)]に私は賛成したい。

だが、はたしてノスタルジアとは何か。たんに古き良き時代を偲ばせる描写の存在を指摘するにとどまらず、この言葉に、アメリカ人の琴線にふれる本質的な何かを探り出そうとするのなら、すぐれて文化的な見地から、この作品をもう一度読み直す作業が必要となるだろう。

しかし、注意すべきは、ややもすれば批評家が陥りがちな、この小説の解釈を単純化しすぎる危険性である。たとえば、この小説の主題が、失われゆくアメリカの田園に対する郷愁と、台頭しつつある産業主義・都市文明への批判であるとする考え方がある。確かに、画一的な機械文明の持つ非人間性に対するアンダソンの批判精神は周知の事実であり、文明の象徴としての都市の存在がこの小説においても影を落としていて、ワインズバーグという田舎町と潜在的なコントラストを成している事実は認めねばならないだろう。だが、はたしてアンダソンの眼が単純に後ろ向きで、いまだ文明によって汚されていない田園風景、いわば過去の方にのみ向いたものかという点になると、大いに疑問の余地がある。むしろ、時には全く逆のことさえ、たとえば後で述べるように、「手」と題された章一つを検討してみれば容易に示しうるのである。

同様に、中西部の田舎町の因習や住民の狭量・無理解を主題と考える立場についても、再考の必要がある。この小説の登場人物をめぐる「グロテスク」な悲喜劇に対するアンダソンの態度には、冷静で複雑なものがあって、彼らを単純に犠牲者という範疇で捉えることにはためらいを感じざるをえない。アンダソンが彼らに同情と共感を抱いていることは否定できないにせよ、同時に、その底には、距離を置いた覚めた眼で事態のなりゆき

を見つめる、作家の批判的な視点が存在することを忘れてはならないだろう。

ところで、以上のような問題点に加えて、もう少し素朴で客観的な疑問がある。一読すれば誰もが気づくように、この小説はジョージ・ウィラードという視点的人物を中心に、各々の挿話で通常一人のグロテスクな人物が描かれる、短編の集まりという体裁をとっている。ところが、「グロテスクな人々についての本」という風変わりなタイトルを付された序章が、それに読く21の物語とは著しく肌合いを異にしているという事実を一体どう考えればよいのかという点が一つ。そして、同じく作品構成という観点に立てば、明らかに作品の統一を乱す「神への思い」という物語をアンダソンが作品中に組み込んだ点も、また問題とされねばならない。この物語は、副題に「四部にわかれた一つの物語」と書かれているように、四つの章が一つの纒まった物語を形成していて、上に述べた『ワインズバーグ』の通常の章構成のパタンには当てはまらない。しかも、ここにはウィラード青年は登場せず、物語の主要な舞台もワインズバーグから少し離れたベントリー農場に置かれている。さらに、ベントリー家年代記という物語の設定も，『ワインズバーグ』の中では異様と言わざるをえない。分量的にみても、この部分は小説全体のおよそ$\frac{1}{5}$を占めるうえに、アンダソンはこの小説を纒めるにあたって、別の形で構想されていたこの物語をあえて意識的に組み込んだとする指摘があることを考えても[(3)]、従来あまり大きく取り上げられることのなかったこの物語を、作品全体との関係において検討してみる価値は少なくないだろう。

さて、序章においてアンダソンは、さまざまな「真実」が並存し多様であるべき現実を固定化することと、それによって起こる精神の硬直化が人々をグロテスクにしたという、『ワインズバーグ』全篇を貫く主題の呈示を行なっている。主題そのものの解釈については、既に多くの批評家による指摘

もあってことさら問題はない。私がむしろ注目したいのは、最近の手稿研究の成果でも明らかになったように、[4] ここで展開される「グロテスク」についての「精緻な理論」(25) を発想するアンダソンが、彼の言うさまざまな「真実」を無定見に列挙しているのではなく、同じ範疇に属する両極端の「真実」を，対立する組み合わせとして考えていた点である。彼は「処女性を真実とするものがあれば情欲の真実もある。富の真実があれば貧苦の真実もある。節約の真実あれば浪費の真実もある」(24) と書いて、対照的に捉えられた「真実」の幾つかを明らかにしている。つまり、アンダソンにとっての「グロテスク」とは、何よりも対立する価値が共存する現実の世界で、一方の価値にのみ基いた単眼的生き方を頑なに固持することに他ならず、まさにこのことこそ、序章で展開される「精緻な理論」の内容であったわけである。この点は、アンダソンを考える際特に留意すべき点であるように思えるが、同時にそれは、すでにふれたこの作家の複雑な視点とも大いに関係する。

ところで、かってアーヴィング・ハウは、『ワインズバーグ』に顕著な不調和（disharmony）があるとするなら、それは序章での主題説明と、それに続く物語部分とが内容的に齟齬をきたしている点に求められるべきだという主旨の発言をした。[5] しかし、対立する価値を共に含んで生きるべきき人生で、一方の価値だけを神聖視してエキセントリックに生きる人々のことをグロテスクと形容するなら、「手」以下の物語はまさに「グロテスクな人々についての本」の名にふさわしい物語である。たとえば、息子を現実的な夫の側にひき寄せられることを危惧するあまり、夫の殺害さえ心に思い描く、自己実現の強迫観念にとらわれた神経症的な母親の話（「母親」）や、謙虚さを忘れ自尊心の虜となった男が自己イメージをキリスト大にまで拡大する話（「思いつめる人」）、あるいは、神に対する思いが嵩じて、肉欲にうずく一介の中年女教師の裸身に神の顕現を見たと歓喜する

聖職者の話（「神の力」）など、列挙しだせば限りがないほど、各々の挿話の主人公の多くが、何らかの形で一つの「真実」にとらわれ、アンダソン流の「グロテスク」な姿を読者に示している。

だが、やはりここで注目したいのは、彼らがグロテスクであるという事実よりも、彼らを見つめる作者アンダソンの視点である。始めにもふれたように、批評家の中には、アンダソンがグロテスクな人々を同情と共感に満ちた暖かい眼差しで眺めていると読む傾向が強いように思われる。もちろん、あらゆる人間に対するアンダソンの旺盛な好奇心は疑うべくもないし、好奇の眼で観察した人間に自然な愛着が生まれることはきわめて当然だろう。「そのグロテスクな人は、みんながみんな、見るも恐ろしいというわけではなかった。あるものは笑いを誘い、あるものは美しいといってもよいほどだった」(23) とアンダソンが書いた事実は、彼がグロテスクな人々を、おしなべて冷淡に突き離して見ていたのではないことを物語っている。あるいは、「手」の最終場面において、主人公に殆ど宗教的と言ってよい、ある種の美を感じさせる象徴的な描写を与えた背後には、おそらく作者の側に、「グロテスク」な生き方がすべての人間にとっての陥穽となりうることを知っていた者としての共感や同情があったに違いない。そのことは、ひいては、しばしば指摘されるこの作家特有の甘さや、作品の結末部の曖昧さということとも関係するように思えるが、いずれにせよ、アンダソン批評の常套句とさえ言える「理解」や「共感」という言葉は、必ずしもその有効性を失ってはいないのである。だが、はたして、アンダソンの作中人物に対する態度を、そのような面からのみ捉えてよいものか。むしろ私は、アンダソンのグロテスクな人物に対する、一面的には捉えきれない愛憎相半ばする見方を充分認識する必要性を強調したい。そして、序章における「理論」を重視する立場からは、従来軽視されがちな作家の批判的視点がより重要なものになる。

たとえば、先ほど紹介した「思いつめる人」の主人公パーシヴァルをここで考えてみてもよい。この、人間に対する憎悪と軽蔑の念に満ちた尊大な町医者が、読者の眼ににわかに興味ある存在と映り始めるのは、メーンストリートで起こったある事故をめぐってである。曳き馬の暴走で幼い娘が馬車からふり落とされて死んだ直後、群衆の一人がパーシヴァルの許へ駆けつける。しかし彼は、死んだ娘を見に行く必要などないとして、要請を「無益な残酷さ」('useless cruelty') (56) で拒絶してしまうのである。ところが、その後彼を訪れたジョージを前にして、この町医者は、彼の不親切に対する町の人々のリンチを恐れながら、次のように自らの状況を一般化する。「とどのつまりは、おれは十字架にかけられる身なんだ。十字架にかけられて、無益に (uselessly) 死ぬんだよ。……もしおれの身の上に何かが起ったら、おれが書かずじまいになってしまうかもしれないあの本を、きみなら書き上げてくれるかもしれないからな。この本の根本思想はまことに簡単なんだ。……それはだな——つまり、人間はみなキリスト、そしてみな十字架にかけられるのだ、ということだよ。」(傍点引用者、56—57) キリストのイメージにひきずられて、自己犠牲や再生といった主題をこの一節から導き出す批評家が跡を絶たない。しかし、はたしてアンダソンが、この一節で人間存在についての高邁な「哲学」を披露していると考えるべきだろうか。むしろ、一見深遠なパーシヴァルの考えは、ただ彼のエキセントリックでグロテスクな性格を照らし出すコントラストとして書き込まれているにすぎないのではないか。パーシヴァルの言葉が崇高に響けば響くほど、それに先立つ彼の尊大な態度と、一転して恐怖におののく小心な態度とが、まさにグロテスクで常人離れしたおかしさを呈してくる。引用文中に書き込まれた「無益に」という言葉が、彼自身、事故を告げにきた群衆の一人に向かって投げつける拒絶の言葉を形容する際にも使われていたことを思い出す必要があるだろう。つまり、もしこの

主人公に悲劇があるとするなら、その悲劇は彼自らが生み出したものであり、それをキリストのイメージで語るパーシヴァルは、極論すれば、滑稽な道化の役割を自ら演じていることになる。しかも、彼を呼びに来た男が、実は医師の拒絶の声を聞く前に既に慌てて引き返していたという説明は殆ど決定的と言ってよい。なぜなら、主人公の心の内に何ら関与しない現実を前に、彼は徹頭徹尾自身の固定観念が生み出した一人芝居を演じているのであり、作者アンダソンは舞台から安全な距離を保ちつつ、このグロテスクな芝居を冷静に眺めている、というのがこの物語の基本構図だからである。そのことは、医師の発言を「興奮した口調」と形容し、彼の動作を「おずおずと」(56) といった言葉で描写するアンダソンの筆致からも察することができるが、さらにこの章の終わり近くに描かれた一つの鮮明なイメージの中に、その具体的現われを読み取ることができる。主人公は、ありもしないリンチの場面の中で、メーンストリートの街灯に吊るされた自分の姿を空想する。だが、このあまりに卑小なイメージと、すぐその後に彼自らの口を通じて語られる十字架にかけられたキリスト、という崇高なイメージとの落差は滑稽なほど大きい。そして、それがそのまま、現実と、固定観念に生きる主人公との埋め難い溝に重ね合わされ、その背後に、「思いつめる人」の持つ哀しむべき滑稽さを冷ややかに見つめる作家アンダソンの存在を浮き彫りにしている。

今、「思いつめる人」という話を例にとって述べたことは、多かれ少なかれ他の物語の多くにも当てはまるが、とりわけ「冒険」や「神の力」などでは、そのことがひときわ鮮やかなイメージを伴って語られている。アンダソンにとって、現実を忘れた観念の一人歩きということは忌むべきものであったらしく、『ワインズバーグ』において、「思いつめる人」(“The Philosopher”)、「創意の男 (“A Man of Ideas”)、「物思う人」(“The Thinker”) といった「観念」にまつわるタイトルが散見されることも、

そのことと必ずしも無関係ではないだろう。また、宗教――神に対する強迫観念――が当然のことながら大きな取り扱いを受けていることはやはり興味深い。たとえば、「品のよさ」という章で、「眼の下の毛のない皮膚を醜くたるませ、生々しい紫色の尻をした」醜悪で「グロテスクな猿」(121)にたとえられる主人公の陥る悲劇の原因が、もとはといえば「熱烈な宗教心ともいえるような生まじめさ」(125) にあったことは、アンダソンが宗教をどのように考えていたかを知る手だてになるだろう。

ところで、あまりに極端に観念によって現実を生きること、しかも、その観念が当然現実の一面しか捕捉していないとすれば、その結果は悲劇とも喜劇ともつかない、まさにグロテスクな状況を生み出すことになる。もしこのことが、アンダソンの言う「グロテスク」の真意であるとしたら、彼はやはり序章の中で、きわめて適確に『ワイズバーグ』全体の主題を述べていると考えることができる。この章が作品に「不調和」を生み出すのではなく、むしろこの章の存在故に、一見散慢な各々の物語が一つの統一的テーマのもとに緊密に結びついているのである。

さて、これまでのところ、アンダソンの言う「グロテスク」の意味を、幾つかの物語を例にとって考えてきたが、ここで再び冒頭の問いに立ち戻って、「手」と「神への思い」と題された二つの物語を比較対照しながら、視点を少しずらした別の角度からこの問題をさらに検討してみたい。 後者についてはすでにその問題点を指摘しておいた。前者の重要性についても、たんに作品中最も有名な物語の一つであるだけでなく、完成までおよそ200の修正が施されたという事実が物語るように、アンダソンがこの物語の執筆に特に神経を使った痕跡が見られることを述べるだけで十分だろう。[(6)] これら二つの物語を注意深く比べてみると、そこにはあるきわめて重要な構図が浮かびあがってくるのだが、そのことを示すためにまず「手」から具体的に検討してみよう。

この物語の主人公に関して始めに注目してよいことは、そのグロテスクさが彼の夢想癖と結びついていることである。たとえば、以前の勤務校を追い払われることになった原因も、もとはと言えば、彼が「夢見心地で話し込んだり」「ある種の夢を生徒たちの心に吹き込もう」(31—32) としたりする性癖にあった。もちろん、直接的な理由はあくまで彼が、生徒に対する倒錯した性的嗜好を疑われたためであって、親たちの性急な判断を誘う要因が彼の中にあったことは否めない。だがそれ以上に、物語全体のトーンが夢の世界の住人としての彼の立場を際立たせていることを見逃すべきではないだろう。言いかえれば、物語の最初から、彼は徹底して現実離れした夢想家として登場しているのである。そのような人物が、多様な現実を正常に生きぬくことができない「グロテスク」な存在であることは言うまでもない。彼はウィラード青年に対し、夢想の大切さを説き、町の人々への軽蔑をあらわにしながら，「夢見ることをはじめなきゃ駄目だ。これからは世間の騒々しい声に一切耳をかしてはいけない」（傍点引用者、30) と叫んで、青年を「現実」から切り離し、「夢」の世界へ誘うことを試みるのである。だが、はたして人間は「現実」に一切背を向けて生きることができるものなのか。ビドルボウムの世界が、ライドアウト教授の言うように、ウィラード青年が多くの葛藤を経て最終的にコミットすべき「夜の世界」[(7)] だと言えるものなのだろうか。むしろ、一見賞讃すべき理想主義者ビドルボウムが、実際は、現実の圧倒的な力の前で何の力も持たない、文字どおりの夢想家でしかないというアンダソンの認識は、たとえば次のような描写に読み取ることができるはずである。「------ウィング・ビドルボウムはまたしてもわが田に水を引きにかかっていたのだ。彼の声はやわらかく懐古調になり、ほっと満足そうな吐息をもらすと、長々ととりとめもない話へと乗り出したのだが、無我の境をさまよう人のような話しぶりだった。」（傍点引用者、30) この部分に作家の皮肉を読み取ることはあるい

は思い過ごしかもしれない。だが、自分の心に忠実で純粋な生き方を送りたいと願うビドルボウムに共感を寄せる作者の存在を認めるならば、少なくともそれと同程度に、どこまでも自分の殻に閉じ込もって、自己批判へとつながる客観性を欠くビドルボウムの生き方に、アンダソンが反発を感じているとみることもまた許されねばならないだろう。

ところで、引用文中の「懐古調」('reminiscent') という言葉に注意する必要がある。なぜなら、主人公の住む「夢」の世界が問題であるのは、むしろそれがひたすら現実に背を向けて過去へと向かうその時代錯誤性故であるからだ。もとより、何らかの形で過去に執着するあまり、現在置かれている環境を正確に理解しえないということは、この小説のグロテスクな人物の多くに共通する特徴だが、殊にビドルボウムにおいては、そのことが象徴的なまでに鮮明に描かれている。実際、この物語の中での彼は、文明の支配する現実に背を向けた人間としての自らの立場を明らかにする。言うまでもなく、「文明」が去った後に残るものは「自然」である。したがって彼が、ウィラード青年に語って聞かせる理想世界を「往古の牧歌的な黄金時代」に置いて、「緑の広野」を越えて集まって来た若者にとり囲まれながら、「小さな庭園の木の下に坐って」(30) 話をするイメージを展開するのも、当然のなりゆきと言うべきだろう。そこには、古典的な「心地好き場所」のかすかな反映すら窺える。もちろん、ここで言う「牧歌的」とは、むしろ「原始主義」('primitivistic') と呼んだ方がより妥当であろうし、「牧歌」という言葉を使うにせよ、それは「荒野」と「文明」の緊張関係の上に成り立つ牧歌主義ではなく、温和な自然との批判なき一体感、すなわち、レオ・マークスが「感傷的な牧歌主義」[8] と呼んだ範疇で捉えるのが分かりよいだろう。だが、この牧歌主義は、当然のことながら、現実を前にしていかにも無力である。もともとビドルボウムの理想世界自体、「小さな庭園」という表現に感じられる「囲まれた庭」としてのイメージ

が示唆するごとく、おおらかな「黄金時代」のイメージとは微妙なずれをみせていた。同様に、暗く澱んだ存在である主人公の肉体のうち唯一溌剌とした彼の手が、他人に夢を伝える「表現機械のピストン桿」(28) の役目を与えられているにもかかわらず、それが町の人々の注目を集めたのは、それが異様な早さで動いて莓摘みをするという、きわめて物質的で現実的な価値に基くものであったことはいかにも皮肉である。しかも、「ウィング・ビドルボウムの物語は、手の物語だ」(28) というようにいわば主人公の提喩と化した彼の手が、町の人々にとって競馬レースの優勝馬を見るのと同じ好奇の目で眺めるべき対象にすぎなかったうえ、「同時にその手のために、そうでなくてもグロテスクでうさんくさい人物が、なおさらグロテスクになった」(29) とされる点に、主人公の反文明的理想とは無関係な処に厳として存在する現実のしたたかさを読み取るべきだろう。結局、この物語におけるアンダソンの意図は、現実に目をそむけ一心に牧歌的な夢を見読ける主人公の不毛さを、「手」という象徴を巧みに利用することであばき出すことにあったに違いない。さらにアンダソンは、この章の冒頭に、主人公の家の背景に関する次のような描写を挿入している。「その小さな木造家屋は、オハイオ州はワインズバーグの町はずれ、一つの谷が尽きるあたりにぽつねんとたっていた。家の前の広い畑には、うまごやしを生やすつもりで種をまいたのに、黄色いたがらしばかりが生い茂っていた。」(傍点引用者、27) 『ワインズバーグ』に限らずアンダソンの作品中の自然描写は、いずれも中西部の現実の自然に基くものであることに疑いの余地はない。だが、「うまごやし」('clover') が喚起する「牧草」としての牧歌的イメージと、「たがらし」('mustard weeds') によって連想される不毛なイメージを考慮に入れれば、この一見さりげない自然描写の深層に、この章のモチーフがきわめて象徴的に書き込まれていると読むことができることも、また指摘しておくべきだろう。しかも、もし多くの論者

が指摘するように、自然に対する「牧歌的理想」あるいは自然との「契約」がアメリカ文化に内在するのなら[9]、この一節におけるアンダソンは、アメリカの現実の自然におけるある不毛な情景を軸に、主人公のグロテスクな牧歌主義を描きつつ、同時にアメリカ文化の孕む「感傷的な牧歌主義」の持つ不毛な側面を、象徴的次元で抉り出していると考えることが許されるかもしれない。言いかえれば、ここにもまた、あの「〈文明〉対〈自然〉というアメリカ文学における最も根源的な対立[10]」のささやかな変奏がみられるのである。

さて、こうした読み方に多少とも根拠があると思えるのは、今まで検討してきたこととは全く対照的な構図が「神への思い」に発見されるからである。もちろん、この物語の主人公ジェシー・ベントリーの置かれた境遇が一面悲劇的なものであることは確かである。しかも、牧師志願のきゃしゃで物静かな彼が、南北戦争での兄たちの戦死のため自分が代わって農場拡大の任を一手に引き受けざるをえなくなるという物語の設定には、ビドルボウムの悲喜劇にはみられない、ある運命的な悲劇性すら感じられる。だが、彼にはやはり、ビドルボウムやパーシヴァル同様、エキセントリックな性格が始めから備わっていたことを、アンダソンは書き忘れていない。彼が小さい頃より神と聖書に人一倍思いをこらしてきたのも、もとはと言えば、自分を「並はずれた特別な人間だ」と思い、「仲間の連中を見まわし、その生き方がいかにも愚かしいことがわかるにつれて」「自分の人生をすぐれて立派なものにしたい」(69) と願う気持に端を発していたのだった。そうした彼の宗教心が嵩じた結果、南北戦争後の北オハイオにおける農地の開拓と、彼がひたすら理想と仰ぐ旧約的世界のヴィジョンとがいつしか不分明となり、ついには、農地開拓が「地上の神の王国の建設」(73) につながると思い始めるのも論理的必然であっただろう。詳しく内容を紹介するまでもなく、この物語が「ピュリタンの勤労倫理についての批判[11]」

であることにまちがいはない。だが同時に、広大な畑地がすべて自分の所有に帰すべきだと考え、ひたすら農地拡大に励む主人公の姿が、その宗教的背景と相俟って、アメリカの膨脹主義政策を支えた「明白なる宿命」の観念を自然に連想させることを忘れてはならないだろう。アンダソンは第一部の途中で、最近50年間に中西部を見舞った生活革命の変遷を具体例を挙げて述べている。しかもこの物語自体すでにふれたように、四部からなるベントリー家年代記の体裁をとっていることからも、「神への思い」をたんにピュリタニズムについての批判と解するのみならず、アメリカの歴史に対するアンダソンなりの発言であると理解することも、十分根拠があるように思える。

さらに、ジェシーのエキセントリックな夢想をビドルボウムのそれから峻別するものは、「文明」に対する彼の態度である。「当時のあらゆる人間がそうであったように、生成期の近代産業主義が国内に及ぼしつつあったさまざまな強い影響を、彼もまた受けていたのだ。傭い人の数をへらしても農場の仕事ができるような機械をいろいろと買い込みはじめたし、もっと若ければいっそ農業などやめてしまって、ワインズバーグで機械製作工場でもはじめるのだが、と思うこともしばしばだった。------鉄条柵をつくる機械も考案した。」(80—81) つまり、「手」の主人公が「文明」を拒否して「自然」に生きる夢想家なら、同じように遠い昔の栄光を夢見るジェシーは、「文明」の象徴である「機械」によって「自然」を征服しようと企てる、全く正反対の立場をとる理想主義者なのである。だとすれば、ジェシーの理想主義が如何なる結末を迎えたかということが当然問題となる。ここで注目すべきはジェシーの孫デイヴィッドである。跡継ぎを熱望するジェシーの孫として生まれた彼は、12才の時ワインズバーグの母の許を離れてベントリー農場に住むようになる。以来、それまで暗く陰うつな農場全体が陽気になり、誰もが幸わせになるという筋の運びになるのだが、「神

への思い」の結末は、その彼がジェシーに連れられて森の中に入り、旧約のアブラハムさながら小羊の犠牲を捧げて神への感謝を示そうとしたジェシーに恐怖心に抱き、持っていたパチンコで彼を打ち倒した後、農場へは二度と戻らないことを誓いながら何処へとも知れず逃げ去る状況を克明に描いている。一体この結末は何を意味しているのだろうか。極端に昂揚したジェシーの「神への思い」が、無関心で冷酷な現実からしっぺ返しを受けるという、『ワインズバーグ』の基本構図がここでも表現されていることはまちがいない。と同時にここで注目したいのは、少年が「自然」と一体化した、いわば「自然」の子としてのイメージで終始描かれている点である。彼にとって「この田舎では、あらゆる物音が心たのしい物音だった。」「朝、眼をさまして、そのまま床のなかにいる彼の耳に、窓を通していろんな物音が聞こえてくる。すると、たのしさが体じゅうに溢れるような気がした。------どこやら遠くの畑で牝牛が鳴くと、それに応えるように廐舎の牡牛が鳴く。------デイヴィッドはベッドからとび起きて、窓に駈けよるのだった。」(82—83) たとえばこの一節が喚起するイメージは、明らかにのどかな田舎の牧歌的風景である。さらに、「ほかの田舎の子供たちは------みんな鉄砲をもっており、それで兎や栗鼠をうちに出かけたが、デイヴィッドはいっしょに行くことはなかった。そういうとき彼は自分でゴムひもと二股になった木の枝でパチンコをつくり、一人で木の実拾いに出かけた。」(傍点引用者、98) という部分にも、「自然」の子としての彼の特質が表現されていると考えるべきだろう。なによりも、この物語の明白な下敷である旧約の『サミエル記』において、デイヴィッド (ダビデ) が元来竪琴の上手な牧童であった事実 (1 *Sam.*, 16) が、彼と牧歌的「自然」との断ち難い結びつきを暗示している。そのように考えるなら、この物語の結末は、「文明」の使徒たらんとするジェシーが、結局「自然」の子であるデイヴィッドによって打ち負かされる状況を描いていることになる。こ

の構図は、既に「手」を検討した際見出した構図とは、内容上対照的と言ってよい。

にもかかわらず、背後にある作家の視点にはきわめて似通ったものがある点を見逃すべきではないだろう。つまり、「自然」に逃避するにせよ、「文明」に赴くにせよ、人間存在の現実は両者が分かち難く結びついていることを認識することなしに可能ではありえない、というきわめて平凡ではあるものの、常に変わらぬ真実をこれらの主人公が無視した処に、「グロテスク」な人間に変身する契機があったのである。そしてアンダソンは、全く独立したこれら二つの物語を描く一方、序章における「グロテスク」についての彼の考え——対立する価値の一方への度はずれた固執——を、この二つの話を通じて対照的に描き出したと考えることができる。こうみてくると、「神への思い」をあえて『ワインズバーグ』に組み入れたことは、テーマに歴史的広がりを与え、この小説に奥行きを生み出したという意味で、アンダソンにとって一種の作戦的勝利であったとみなしてよいだろう。

アンダソンが「グロテスク」を社会的コンテキストで捉えていた一つの証拠として、さらに次の発言を引用しておきたい。彼は第一次大戦の推進者たちの精神の硬直を指摘しつつこう述べる。「連中は一つの真理をひっつかんで、ものを考える人ではなくて、科学者になってしまったんですよ。二たす二は四だと、信じ切っています。自分たちの真理を抱きしめることで、連中はグロテスクになってしまったんです。[(12)]」

このように考えるアンダソンの思考パタンをどう把握すべきかは、ウィラード青年の「感情教育」も含め、稿を改めて論じるべき問題であるが、上で検討した挿話の背後にかいま見られるアンダソンの理想が、精神の自由である点は指摘しておく必要がある。現実が多様である以上、正しい生き方とは、一つの「真理」に基いて現実を潔癖に裁断することではなく、

相反する視点を内に含んだ複数の視点から、現実を相対化して生きる柔軟な生き方であろう。言いかえれば、あらゆる「真理」が絶対的なものでないことを認め、すべての「真理」に心を開く精神のしなやかさこそ、アンダソンがこの作品に盛り込んだ主張ではなかっただろうか。

言うまでもなく、この思想の背後には、世紀転換期のアメリカの状況がある。アルフレッド・ケイジンも指摘するように[13]、農業社会と工業社会の間で、いわば近代と現代の二つの世界が交錯する時代に思春期を過ごしたアンダソンにとって、価値の多様性ということは、頭で考える以前に感覚的了解事項であったのではないかとさえ思われる。おそらく彼にとって、「田園」と「機械」が程良く調和した世界こそ理想的な世界であったに違いない。そのような理想が、ともすれば「機械」の圧倒的な力の前で「田園」を失いかけている現代人の眼に、まさにノスタルジアをかき立てる、ある種ののびやかさを持った世界として映ることは否定できない。

もちろん、アンダソン的思考自体を、「感傷的牧歌主義」と呼んで批判することも不可能ではないだろう。だが、少なくとも『ワインズバーグ』に関する限り、今までみてきたようなアンダソンの観念の先走りに対する警戒心と、生来備わっていたと思われる等身大的思考が、むしろ彼の現実認識をある種の普遍的な高みにまで押し上げているように思える。その批判的態度にもかかわらず、ライオネル・トリリングが、彼のアンダソン論の締めくくりをアンダソンに対する賛辞で結んだのも[14]、おそらくは同様の考えによるものであったに違いない。

言うならば、この作品を正しく理解するためには、読者の側にも予想以上にアイロニカルな見方が要求されているのである。

注

(1) *Winesburg, Ohio* (New York, "Viking Compass Book Edition,"

1960）引用頁は訳文の次に括弧に入れて示す。訳文は小島信夫・浜本武雄両氏訳による講談社版（1979）を一部変えて用いた。

（2）John H. Ferres, "The Nostalgia of *Winesburg, Ohio,*" *The Newberry Library Bulletin* Vol. Ⅵ, No. 8 (Chicago, 1971), p. 236.

（3）Cf. David Anderson, *Sherwood Anderson: Winesburg, Ohio* (New York, 1967), p. 27; Jarvis A. Thurston, "Anderson and 'Winesberg': Mysticism and Craft," *Sherwood Anderson: Winesburg, Ohio,* ed. John H. Ferres (New York, "Viking Critical Library," 1966), p. 341; Brom Weber, *Sherwood Anderson* (Minneapolis, 1964), p. 22.

（4）William L. Phillip, "The Editions of *Winesburg, Ohio,*" *Sherwood Anderson Centennial Studies,* ed. Hilbert H. Campbell & Charles F. Modlin (Troy, 1976), p. 154.

（5）Irving Howe. *Sherwood Anderson* (1951; rpt., Stanford, 1966), p. 107.

（6）William L. Phillip, "How Sherwood Anderson Wrote *Winesburg, Ohio,*" *The Achievement of Sherwood Anderson,* ed. Ray Lewis White (Chapel Hill, 1966), p. 75.

（7）Walter B. Rideout, "The Simplicity of *Winesburg, Ohio,*" Ferres, p. 295.

（8）Leo Marx. *The Machine in the Garden* (1964; rpt., New York, 1978), p. 5.

（9）Leo Marx, p. 3. *et passim,* David W. Noble, *Historians Against History* (Minneapolis, 1965), p. 3. *et passim.*

(10) 大橋吉之輔他編『総説アメリカ文学史』(研究社, 1975), p. 160.

(11) Welford D. Taylor, *Sherwood Anderson* (New York, 1977), p. 23.

(12) William A. Sutton, *The Road to Winesburg* (Metuchen, 1972), p. 441. 訳文は浜本武雄氏訳による。講談社版『ワイズバーグ・オハイオ』解説 p. 397.

(13) Alfred Kazin, *On Native Ground* (New York, 1942), p. 211.

(14) Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (New York, 1940), p. 33.

（文学部助手）